成する東西方向の掘立柱塀も、同様に東へつづいていきます。ただし、この石組大溝はある時期に埋められて、底に石を敷き詰めた幅0.9m、深さ0.3mほどの浅い石組溝に造り替えられていることが、あらたに判明しました。

北限に近い関係からか、建物の密度はさほど高くありません。調査区東南部で、大型の掘立柱建物1棟を確認している程度です。一方、遺物は大量に出土しており、とくに藤原宮期の溝からは膨大な量の土器が見つかりました。

発掘調査はまもなく佳境にはいり、9月後半から順次、遺構写真の撮影や平面実測などをおこなっていく予定です。　（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

文化遺産研究部の調査研究概要

年度計画にもとづく調査研究も、4・5月の準備期間を経て、6月以降いよいよ本格的に稼動し始めました。とくに7月に入ってからは、町並み調査や文書調査、遺跡整備の調査など、現地に出かけての調査が多くなっています。

建造物研究室では、醍醐寺、唐招提寺、東大寺、元興寺など古代建築の調査をはじめ、高山市の町並み調査や文化財建造物の保存修復に関する研究など、活動の場面は多岐にわたります。またこれに併せて、文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿院復元の事業に、専門的・技術的な立場から援助するという大きな仕事があります。ただし、本年度からは独立行政法人化に伴って、事業主体である文化庁などの要請に応じて助言し援助するという立場に変わっていますので、昨年までとはいささか異なる戸惑いもあります。

北海道常呂遺跡の整備状況

歴史研究室では、7月中旬に東大史料編纂所と合同で薬師寺の文書調査をおこない、7月下旬には石山寺の依頼による文書調査に参加しました。石山寺では、最近その所蔵が再確認された「薫聖教（においのしょうぎょう）」13巻に関する記者発表が26日におこなわれ、その準備に協力しました。また8月には、東大寺の聖教文書類の調査をおこない、文化庁の醍醐寺の聖教調査に参加しました。その他、興福寺文書や北浦定政「松の落ち葉」の調査や写真撮影なども継続して実施しています。

遺跡研究室では、全国各地で整備されている史跡・遺跡の中から、より大規模なものを120箇所程度選び、その整備・活用・管理の状況を調査研究する計画を持っています。初年度に当たる今年は、まず対象とする遺跡の選び出しと調査項目などの整理をおこない、現地調査は北海道と東北地方を計画しています。来年度以降、順次地域を広げていく予定です。また、古代庭園に関する調査研究も重要な課題です。今年度は、日本庭園の源流ともいえる古墳時代以前の「流れ」に関する遺跡や遺構を対象にした研究会の開催を計画しています。これらに併せて、発掘調査で確認された「庭園」遺跡のデータ・ベースを作成し、奈文研のＨＰで公開していく予定です。

（文化遺産研究部）

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修「一般課程」

今年の「一般研修」は、例年よりも10日ほど開始を早め、6月12日から7月17日の日程で実施しました。考古学調査の経験が十分でない埋蔵文化財担当職員に対する研修であり、本州・四国・九州から総勢20名の研修生が参加しました。考古学の方法論、各時代考古学の概説、文化財及び文化財担当者の法的基盤等に関する基礎知識の習得のほか、最も基本的な考古学遺物の観察・実測の習得に力点を置いて、例年よりも多くの時間を割き、個人指導も採り入れました。

研修生の評判は概ねよかったのですが、とくに好評だったのは、遺物実測実習と臨地講義・飛鳥藤原地区の遺跡見学です。一方、今後の研修に生かすべきいろいろな要望もありましたが、中でも、彼らが

帰ったあと従事しなければならない発掘調査に関する実地研修を望む声が多くあります。例年出される要望であり、関係者はそろそろ対応を考えねばならない時期にきていると認識しています。

発掘技術者研修「保存科学課程」

5月22日より6月6日の16日間にわたり、保存科学課程の研修をおこないました。参加者は、青森県から鹿児島県まで総勢13名です。保存処理の担当に抜擢された方、日頃の発掘調査業務に保存科学の知識を生かしたい方、保存科学全般について概略を学びたい方など、参加の動機は様々です。

研修内容は、保存科学の基礎から実際の材質・構造調査、保存処理、保管環境、現場における応急処置を含むフィールドワークです。この現地実習は平城宮跡発掘調査部の協力を得て、興福寺中金堂の発掘調査現場においておこなうことができました。また、保存科学における写真記録の重要性を理解してもらうために、写真室の協力を得て、写真撮影実習も併せておこないました。

発掘現場での実習風景

2週間という限られた短い期間の中では、取り扱う内容が多岐にわたることから、スケジュール的にもかなりハードな面があります。しかし、保存科学についての講義・実習を一通り体験することで、発掘現場での応急処置や遺物の取り上げ方、保存処理の概要について理解が深まり、基本的な技術の習得がなされたものと思われます。研修生からは、発掘調査における保存科学の果たす役割や保存処理の重要性に対して認識が新たになった、これまで手を出せないでいた遺物の保存処理を自前でおこなう、あるいは自前でできなくても外注する際の留意点を整理し、仕様書を作成することに大きな一歩を踏み出せたとの声が聞かれました。本研修は一応の成果をあげることができたものと思われます。

研修終了後、各々の任地に戻った研修生からは、遺物・遺構の保存について、それぞれが抱える問題に関する問い合わせを受けたりしています。また、研修生間の情報交換も頻繁におこなわれているようです。研修生が、それぞれ自分のできることから動き出している状況を見て、本研修を担当した者としての安堵と喜びを感じている次第です。

（埋蔵文化財センター）

博物館実習生の受け入れ

昨年度からおこなっている博物館実習生の受け入れも2年目をむかえました。今年度は9月3日（月）から7日（金）までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。

博物館実習風景

実習生はそれぞれ奈良女子大学から2名、帝塚山大学から4名、滋賀県立大学と広島大学から各1名の計8名と昨年度の5名に比べると、少し増加しています。徐々にではありますが、当館が博物館実習生の受け入れをおこなっているということが、各大学関係者に認知されつつあるのでしょう。

実習は、展示品貸借の実務、展覧会の実施について、博物館における展示解説、展示解説とマルチメディア、建築史概説と題して講義および演習をおこないました。以下、その一部を紹介します。

「展示品貸借の実務」では、展示品貸し借りの際の作法について当館の展示品を例に講義をおこない、演習として展示品の梱包から開梱までを実際に実習生がおこないました。当館の性格からして、発掘調